

ふるさとの話をしよう

高度成長期の経済成長を支えた要因の一つが、高い教育に支えられた良質の安い労働力だと言われている。彼らは集団就職などで都会に来了。もちろん、大企業に就職した人もいたが、多くは中小企業で働いた。その中のかかりの人が都会に定着していった。こうした人たちの生活や文化は、例えば、「Always 三丁目の夕日」や「男はつらいよ」の団子屋の隣の印刷工場の情景として描かれているが、それ自体を取り上げた文学作品や評論はないように思う。文学者は自分の感性だけでなにかをとらえようとするし、思想家はもっとバイアスをかけて事実を語る。評論とかマスコミ関係は最も怪しい。その時代に少年期を過ごした私の感性が納得しないので、ないと感じているのかもしれない。

北原謙治が歌った「ふるさとのしよう」は、都会で働く地方出身者の歌である。歌詞の内容は素朴で、都会の下町の女性に「ふるさとのはなしをしよう」と問いかける。青年は女性と家庭をもって都会に定着することを考えている。人は自分が育った風土との関係で人格を形成する。その故郷に対する思いは複雑で、青年にとって故郷は良いことばかりではなかったはずだ。しかし、それを含めて、自分と故郷を受け入れてもらいたい。また、女性と女性の故郷を受け入れたい。つまり「好きだ」という代わりに「ふるさとのはなしをしよう」と問いかけるのである。キダ・タローが作ったメロディーは自然で難しい歌ではない、カラオケなどであまり上手に歌われても困る。素朴に歌った方が味がある。こういう素朴な歌を歌って独特の雰囲気を作っているところが北原謙治のうまさである。いわゆる演歌なので好みがわかるが、私はうまいと思う。新川二郎（後に新川二郎）が歌った「東京の灯よいつまでも」も似たような情緒を持つ曲なのだが、挫折して恋人と別れて故郷へ帰る歌である。青年は、「あすを夢見る 昨日もあろう。」と夢を手放して故郷へ帰ることを受け入れる。「淡い別れに ことさら泣けた」という恋人との別れの底流には、心ならずも夢を手放すことを淡々と受け入れなければならない、それだからこそいっそう深い痛みがある。とても技巧的で巧みな作詞である。新川の風貌は垢抜けないし訛りがある。その風貌と訛りに不思議な説得力があって、歌詞の青年の思いに共感してしまう。いまでも、しばしば歌われるのはそのためだろう。時代的・時系列的に考えると、「ふるさとのはなしをしよう」は「東京の灯よいつまでも」より、前の段階であり、「ふるさとのはなしをしよう」は「東京の灯よいつまでも」よりかなり前に歌われた歌だと思っていた。メロディーを考えても「東京の灯よいつまでも」の方が新しさを感じる。「東京の灯よいつまでも」は今でも時々歌う人がいるということもあるかもしれない。調べてみたら、「ふるさとのはなしをしよう」が発表されたのは1965年で、「東京の灯よいつまでも」が発表されたのは1964年、前回の東京オリンピックの年である。「ふるさとのはなしをしよう」の方が1年後で新しい。東京オリンピックのとき、私は中学二年生であったし、我が家でもテレビがようやく見られるようになった。私は、これらの歌をテレビを通して聴いていたにもかかわらず、時間的な順序

が逆転していた。Uターンのような人の動きが盛んになったのは、それからかなり後のことだということも関係しているのだろう。もっと驚くべきことに、井沢八郎が歌った「あゝ上野駅」も東京オリンピックの年 1964 年に発表されていた。新宿のはずれで生まれて 20 歳過ぎまでそこで暮らしたので、私にはこの歌に対する共感はない。まだアマチュアであった関口義明が作った歌詞も好きになれない。しかし、上野駅に歌碑が立っているようにこの歌に共感する人は少なくない。この歌の歌詞と同じような経験を持つ人は少なくないだろう。当時、東京でも高校進学率は 80% ぐらいだったと思う。高校に進学しなかった中学校の同級生も少なくない。高校進学率はまだ 50% ぐらいだった地方もあっただろう。東京オリンピックのころ、集団就職で東京に来る人はまだたくさんいて、その人たちの多くは故郷に帰れず都会に定着して新しい都市住民となっていった。その一方で、これもまたそう望んだわけではなくても、都会から地方に戻る人もいた。東京オリンピックの年 1964 年には、東京がタイトルに入っている歌が多く発表された。東京オリンピックを盛り上げようという動きがあったのだろう。面白いことに、これらの歌には「東京の灯よいつまでも」と同じように挫折感のある歌が多い。西田佐知子が歌った「東京ブルース」もその一つである。この歌は 1963 年に作られているのだが、発表されたのは 1964 年である。「赤いルビーの指輪に秘めた あの日の夢もガラス玉 割れて 砕けた 東京ブルース」という歌詞のもつ挫折感や失恋の歌として聞かなくても伝わる。このころ、すでに、戦後復興的な希望は挫折し始めていたのかもしれない。そして、それから 5 年ぐらいで、大学紛争・学生運動の時代となった。そのピークを過ぎたところで私は大学生になったのだが、まだその名残は残っていてキャンパスのあちこちに立看板がならび、ヘルメットを被って棒切れを持った連中が練り歩いていた。私は、全共闘にしても民青にしても、いわゆる学生運動にはまったく共感が持てなかった。私が「ふるさとのほしをしよう」に感じているものは、子供のころ毎日遊んでくれた、父が経営する町工場の職人さんたちのぬくもりである。